



2014年12月22日発行 第 **550** 号

CONTENTS

読後雑感：2014年 第21回 ..... 2  
【中国経済最新統計】 ..... 9



## 読後雑感：2014年 第21回

---

19. DEC. 14

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

1. 「ASEAN シフトが進む日系企業」
2. 「世界でいちばん石器時代に近い国 パプアニューギニア」
3. 「孤独の価値」
4. 「50歳からの“死に方”」
5. 「老いの整理学」

### 1. 「ASEAN シフトが進む日系企業」 春日尚雄著 文真堂 2014年8月20日

副題：「統合一体化するメコン地域」

帯の言葉：「201X年、日本の投資はどこへ向かうのか？」

この本で著者の春日氏は結論として、「(ASEANにおける) カントリーリスクと労働コストにはトレードオフの関係があり、カントリーリスクが低い国では経済の成熟化が進んでいるが、労働コストが高いことから生産拠点としての有望性は薄くなる。そのため生産拠点は“一極化”による危険性と、“多極化”することによる双方の危険性が発生する。しかしこの問題については多面的な想定によって明確に対応を行っている企業は事実上見当たらず、グローバル企業であっても現実の経済性を優先している」、「フラグメンテーション論と産業集積論は一体で語られるべきであり、フラグメンテーション論のみに偏ることは片手落ちになる。これらの統合的理論を構築すべきであろう」、「今回の研究を通じて、地域研究における実証的な分析と理論との融合については難しい点が見られた。この両立については、より多くのケーススタディを積み重ねることが必要である」、「ASEANにおけるこうした業種における研究をおこなうには日系企業研究のみでは不十分になりつつあるため、今後こうした国籍の企業および地場企業についての検討を加えることが必須となるだろう」と書いている。

本書は学術書であり、一般読者を対象としていないため、「フラグメンテーション理論」・「アグロメレーション理論」・「産業クラスター論」などという専門用語がふんだんに使われており、いささか取り付きにくく、わかりにくい。大学の講義用向きではあっても、一般企業人がこの本を読んでも、「ASEAN シフ

トが進む日系企業」の実態や、今後の進むべき道はわからないだろう。なお春日氏は ASEAN の企業が直面しているリスクについて、「多面的な想定によって明確な対応を行っている企業は事実上見当たらない」と書いているが、それを「大企業」と書き直してもらいたい。なぜなら私たち中小零細企業は、すでに連携策を取って、それへの対応を試みているからである。また「日系企業研究のみでは不十分」と嘆き、「日系大企業のみ」に目を奪われているのではなく、研究範囲を「日系中小零細企業」にまで広げるべきである。

さらに春日氏のこの論考からは、日系企業が想定しなければならない当面の最大のリスクが、「中国のバブル経済崩壊」であるという点が、まったく語られていない。春日氏には、このことが日系企業に ASEAN シフトを急がせている要因であるという認識がないからだろう。

## 2. 「世界でいちばん石器時代に近い国 パプアニューギニア」 山口由美著 幻冬舎新書

2014年11月30日

帯の言葉：「不気味なのに超エキサイティング」

ニューギニア島の西半分はインドネシアに属している。したがって行政上は ASEAN の範囲内である。しかし東半分はパプアニューギニアという独立国であり、オーストラリアとの関係が深く、英国王を元首とする立憲君主国家である。なおニューギニア全体は、地理上はオセアニアとして分類されている。ASEAN・南西アジアを調査・研究している私にとって、今までこの国は、ほとんど視野の中に入らなかつたが、本屋の棚で、この本をみつけたので、読んでみた。

ニューギニアは、世界で2番目に大きな島で、西半分のインドネシアの人口は約270万人、東半分のパプアニューギニアの人口は670万人ほどである。想像以上に人口が多いが、そこは島全体が密林に覆われた未開の地であり、黒魔術を信じて生きる人たちが住んでおり、まさに「世界でいちばん石器時代に近い国」だと言われても不思議ではない。鉄道も道路もなく、奥地には滑走路のみの飛行場を利用し、あとは道なき道を徒歩で行くという。マラリヤや治療が困難な皮膚病なども蔓延しており、さすがの私も、この地に縫製工場を作ろうという意欲は湧かない。たとえ作っても、成功することは難しいだろう。ただし、20年ほど前、私はオーストラリアの縫製会社と業務提携をしていたことがあるが、あのオーストラリアの縫製会社と再び組めば、ここにも進出が可能かもしれない。当時、その会社は島国のフィジーに縫製工場を作り、見事に

経営していたからである。この案件を持って、あの会社に行ってみるのも、死ぬ前の一興かもしれない。

### 3. 「孤独の価値」 森博嗣著 幻冬舎新書 2014年11月30日

帯の言葉：「つながらなくて、いいじゃないか。もう寂しくない。孤独を無上の発見と歓びに変える画期的人生論」

森博嗣氏は本書で、孤独を積極的かつ肯定的に捉え、「孤独には大きな価値があり、孤独を楽しむのが日本人特有の伝統である」と主張している。私は、常に「孤独をこよなく愛せ」と主張してきたが、森氏のようにそれを積極的かつ肯定的に論じてきたわけではない。本書を読んで、私の孤独観が、かなり中途半端なものだったことに気付かされた。まさに本書は、「画期的人生論」だと言える。少々回りくどい表現があり、読みづらいところもあるが、多くの人に読んでもらいたい一冊である。

森氏は、寂しさや孤独感の原因を、「“群れ”良しとする動物的な本能が関わっているだろう」と推論しつつ、「それ以外に、各自が想像する虚構の“楽しさ”の喪失への怖れ」であると主張している。そして「死に直結するわけでもないのに、どうして、我々の多くは孤独をそれほどまでに怖れるのか」という問いを發し、それがメディアのせいだと決めつけ、「多くのエンタテインメントでは、仲間の大切さを誇大に扱う傾向があるし、またそれに伴って孤独が非常に苦しいものだという感覚を、受け手に植え付けている」、「あまりにも、メディアに流れる虚構が一辺倒だ、ということに最大の問題があるだろう。たとえば、家族にも友達にも関係なく強く生きている人間を描くことがあるだろうか。友達や家族に裏切られても、自分一人で楽しく生きている道があると教えることができるだろうか。どうしても、そういうものは寂しさを伴ってしか表現できない。一般の人はこうは考えないよね、と決めつけてしまっているからだ」と答えている。さらに「このような洗脳から産み出されるのは、“孤独を怖れ、人とつながる感動に飢えた人々”であり、これはすなわち、“大量生産された感動”を買ってくれる“良い消費者”に他ならない。企業はこんな大衆を望んでいる。社会は、こんなふうにして、消費者というヒナを飼育して、利益を得ているのだ。いくなれば、“家畜”である」と断じている。

次いで森氏は、「日本には、わびさびの文化が古来あるわけだが、ここに見出されるのは、寂しさに美を見つけるその繊細かつ鋭敏な感覚である。西洋の文化では、ほとんどメインとならなかったのが、特に哀れみに美を見つける目

だろう。東洋であっても、中国や朝鮮半島には、この種のものはいくつかある。古いものこそ美しい。散りゆく落ち葉が美しい。朽ちていくものに、単なる哀愁だけではなく、最上の“美”を見つける精神である」と書き、日本の伝統文化を孤独という観点から見直している。そして「人はいずれは死ぬ。それは究極の“寂しさ”だろう。孤独とは、つまり死への連想でもある。死ねばもう誰とも話ができない。誰にも会えない。この世から自分だけが隔離され、なにも見えなくなり、誰にも認められない状態になることだ。しかも、何人もそれを免れることはできない。拒絶しても、必ず訪れる。そういったものから目をそらすのではなく、逆に目を向け、そこに美を見出す精神というのは、この人類最大の難題を克服する唯一の手段だろう。芸術とは、最大の不幸を価値あるものへと変換するものだ、という逆転は、ここにその極致をみることができる」と書いている。これはコペルニクス的発想の転換である。この文章を読んで、私の目からも大きな鱗が落ちた。

また森氏は孤独や寂しさを弁証法的に捉え、「寂しい”、“孤独だ”と感ずることが、そののちに訪れる“楽しさ”のための準備段階なのである。“孤独”を感じたときには、それだけこれから“楽しさ”がある、というふうに解釈すれば良い。それを知っている人が、“さび”の世界に浸ることができる余裕があり、それが“美”でもある」と書いている。また「孤独は人間にとって実に大切に、価値のある状態だ。極端なことを言えば、孤独を感じたことがない人間は馬鹿だと断言できる」と言い切っている。そして森氏は、「孤独は、死とは無関係である。その亡くなった人は、死ぬ間際まで自分の好きなことをしていたかもしれない。それを“孤独だったのね”と勝手に決めつけるのは、余計なお世話というものだ」、「孤独を受け入れることは、つまりは、自由になることでもある。周囲に仲間がいるうちは、ある程度歩調を合わせなければならない」、「孤独とは自由の獲得である」と高らかに宣言している。これには私も驚いた。

その他、森氏は本書で、当今の一般社会では非常識だと思われるようなことを記している。いずれもたいへん参考になるので、下記に列記しておく。

- ・ 「職場が明るくない」とか、「つまらない作業ばかりやらされる」といった悩みが多いようだが、これなども仕事を美化した宣伝のせいで誤解をしている人がいかに多いかという証左ではないだろうか。仕事は本来辛いものだ。辛いからその報酬としてカネが稼げるのではないか。
- ・ 「愛し合う二人」という状況であっても、やはり孤独はつきものだ。ちょっとした喧嘩をただけで、きっとこれまでにないほど大きな孤独感に襲われるだろう。



- ・ 愛情も友情も、楽しいときもあるかもしれないが、確実に貴方を縛るものだ。つまりは、「絆」である。絆というのは、家畜が逃げないように脚を縛っておく縄のことだ。人間に飼われている家畜は、孤独ではないが、自由にどこへでも行けるわけではない。絆が切れれば、孤独と自由が手に入る。
- ・ 孤独を怖れる人、孤独を嫌う人は、例外なく絆に縛られている人だろう。「世の中、そんな甘っちょろいものじゃない。頭を下げ、我慢をして、働かなければ食っていけない。そんなとき、仲間あつての自分だ。一人だけで生きているのではない」と主張するだろう。間違っていない。しかしそれは、絆につながれた家畜の物言いに、僕には聞こえる。
- ・ 友情も愛情も、相手に向かう気持ちのことであって、相手から恵みを期待するものはない。もし、自分が相手からなにかを受けたいと期待しているなら、それは本当の友情、真の愛情ではなく、単なる妄想である。したがって、友情や愛情に満ち足りた人生もまた、自分自身が孤独であることには変わりはないはずだ。孤独を知っている者だけが、友情や愛情に満たされる、と言い換えても良いだろう。

#### 4. 「50歳からの“死に方”」 弘兼憲史著 廣濟堂新書 2014年10月3日

副題：「残り30年の生き方」

帯の言葉：「人生、残りあとXX年。これから先は“覚悟”で決まる！」

この本の題名は、「50歳からの“死に方”」であるが、実際に書き連ねてある内容は、「50歳からの“生き方”」である。つまりこの本で弘兼氏は、現代人の死を80歳に設定して、50歳の読者に、これからの30年の生き方を提示しているのである。「死に方」についての記述があるのは最終章のみで、この本の約90%は「生き方」の教示である。ただし最終章の最終節の、「**このまま世界中の人口が増え続ければ、地球という決まったパイのなかで人口が満杯になってしまうわけですから、100年先か200年先には、“人間定年制”というような制度、つまり皆80歳になったら人は死ななければならないという制度ができるかもしれません。生まれたときからすでにそのコンセンサスの中で生きるという、これまでとは違った生き方をする人類ができるということです**」という記述は、これまでの他書にはまったくなかったものであり、私はここに**新思想の萌芽**を見て取ることができた。この一文だけで、本書を読む価値があると思う。

弘兼氏は、「50歳になってやるべきことは、“定年後の人生をどう生きるか”を考え、そのための準備を始めることです」と書き、50歳の人たちに、「あと30年生きていくのに、いくら必要か」と問い、その計算の中に、「わが子の教育」、「両親の介護」などの費用を見込んでいるかとたまたみ込んで聞いている。そしてその額が相当なものになることを示し、「食費月1万円節約ゲーム」などを提起している。また友人が多いと出費が嵩むので、「友達を減らせ」と主張している。

また弘兼氏は、「50歳になったら最初にすべきことは、“叶わない夢は持たない”とまわりに公言することでしょう」、「タイムリミットを自分で設定して、そのギリギリまで迷わずに頑張るのです。そして残念ながらリミットまでに叶わなかった場合は、いさぎよく諦める」、「なんでもそうですが、10年間一生懸命やれば、プロに近いところまで到達できます」と書き、50歳から60歳までの10年間は重要だと説く。

さらに弘兼氏は、「一人暮らしをしていて部屋で亡くなった人が、本当に孤独を辛く淋しいものだと感じていたかどうかはわからないのです。世の中には孤独を愛する人間だっているわけですから、老人の孤独死＝淋しくも辛いものだとは限らないと思うのです。最期に一人で死んでいくことが恐怖であったなら、普段から人に好かれるよう努力をすとか、人の輪に自分から入っていくという努力をすべきでしょう」と書いている。これには、わたしも同感である。

## 5. 「老いの整理学」 外山滋比古著 扶桑社新書 2014年11月1日

帯の言葉：「90歳の“知の巨人”が実践する知的な老い方“日々にわれわれは賢くなりゆく”」

この本から私は、「知の巨人」と呼ばれる外山氏が書いた「老い（死へ至る人生）の整理」を学ぼうと思い、勢い込んで読んでみた。しかしその思いに反し、内容は「延命のためのハウツー」に終始しており、哲学・思想的香りがまったく無いもので、ガッカリした。確かに外山氏は現在、90歳にして心身共に健康であるという。したがってその長命策を披露することに異論はない。しかし今、後期高齢者の多くが介護対象者となり、政府や地域、家族に多大な迷惑をかけており、本人自身もそのことに申し訳なさを感じている。外山氏は例外的な存在であり、自らの体験や考えを他の高齢者に勧めても、効果は少なく、いたずらに無駄な希望を持たせるだけであろう。むしろ今、必要なことは長命策を語るのではなく、「自らの身体を自らの意志で動かせるときに、いかに自らの“老いを整理”しておくか」なのである。それを流行の言葉で示すと、「終活」と

か「死に支度」ということになる。本書はその対極に位置するものである。

外山氏は本書で、長命策として、「高齢男性も炊事を始めよ」、「老人は怒ってもよい。怒った方が健康的である」、「よく泣き、よく笑って、おのずと清々するのは老人の健康法である」、「年を取ったら、喜捨の心を育みたい。喜捨を実現できれば、延命も夢ではない。そんな風に考えるのが、華麗なる加齢である」、「悪評より延命」、「われわれの心を元気づけ、活力を高めるには、先々に喜びを持つことが必要らしい。楽しみ、喜びを心待ちするとき、人間はもっとも元気を出すらしい」などと、常識的であり新奇性のないことを書き綴っている。

ただし外山氏の、「威張るのはストレス解消効果が大きくて、本人にとっては健康のもとになっていることがある。威張るな、謙虚になれといわれ、おとなしくなると、年より早く衰える人がいる。年寄りでも、威張って元気な人は少なくない。ハタ迷惑ということのを別にすれば、上を向いて威張って歩くというのは健康法の一つである。それを生き甲斐にするのは本人の自注である。ハタ迷惑ということに目をつむれば、立派な生き方だということもできる」という指摘は面白かった。

以上



## 【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 <sub>米</sub> )	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
<b>2005年</b>	<b>10.4</b>		<b>12.9</b>	<b>1.8</b>	<b>27.2</b>	<b>1020</b>	<b>28.4</b>	<b>17.6</b>	<b>0.8</b>	<b>▲0.5</b>	<b>17.6</b>	<b>9.3</b>
<b>2006年</b>	<b>11.6</b>		<b>13.7</b>	<b>1.5</b>	<b>24.3</b>	<b>1775</b>	<b>27.2</b>	<b>19.9</b>	<b>▲5.7</b>	<b>4.5</b>	<b>15.7</b>	<b>15.7</b>
<b>2007年</b>	<b>13.0</b>	<b>18.5</b>	<b>16.8</b>	<b>4.8</b>	<b>25.8</b>	<b>2618</b>	<b>25.7</b>	<b>20.8</b>	<b>▲8.7</b>	<b>18.7</b>	<b>16.7</b>	<b>16.1</b>
<b>2008年</b>	<b>9.0</b>	<b>12.9</b>	<b>21.6</b>	<b>5.9</b>	<b>26.1</b>	<b>2955</b>	<b>17.2</b>	<b>18.5</b>	<b>▲27.4</b>	<b>23.6</b>	<b>17.8</b>	<b>15.9</b>
<b>2009年</b>	<b>9.1</b>	<b>11.0</b>	<b>15.5</b>	<b>▲0.7</b>	<b>31.0</b>	<b>1961</b>	<b>▲15.9</b>	<b>▲11.3</b>	<b>▲14.9</b>	<b>▲16.9</b>	<b>27.6</b>	<b>31.7</b>
<b>2010年</b>	<b>10.3</b>	<b>15.7</b>	<b>18.4</b>	<b>3.3</b>	<b>24.5</b>	<b>1831</b>	<b>31.3</b>	<b>38.7</b>	<b>16.9</b>	<b>17.4</b>	<b>19.7</b>	<b>19.8</b>
<b>2011年</b>	<b>9.2</b>	<b>13.9</b>	<b>17.1</b>	<b>5.4</b>	<b>24.0</b>	<b>1549</b>	<b>20.3</b>	<b>24.9</b>	<b>1.1</b>	<b>9.7</b>	<b>13.6</b>	<b>14.3</b>
<b>2012年</b>	<b>7.7</b>	<b>10.0</b>	<b>14.3</b>	<b>2.7</b>	<b>20.7</b>	<b>2303</b>	<b>7.9</b>	<b>4.3</b>	<b>▲10.1</b>	<b>▲3.7</b>	<b>13.8</b>	<b>15.0</b>
3月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
<b>2013年</b>	<b>7.7</b>	<b>9.7</b>	<b>11.4</b>	<b>2.6</b>								<b>14.1</b>
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
<b>2014年</b>												
1月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( )内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。